

生活綴方成立史の研究

北海道の場合

岡屋 昭雄

〔抄録〕

生活綴方は・戦前の公教育における初等教育の教科目の一つである綴方科の在り方をめぐって、形式指導（表現技術指導）と内容指導（生活指導・認識の指導）との統一が如何にあるべきかという議論からこの営みが発したのである。それは大正デモクラシーの影響を受けた教育界において、個性、自由性を如何に教育の事実として学習者の内面に反映させるかという苦悩でもあった。

生活綴方運動は、昭和四（一九二九）年十月に『綴方生活』という雑誌が民間教育人によって創刊されたのを切っ掛けとし、筆者は、北海道綴方連盟の設立からの歴史を辿りつつ、そこで何が問題とされ、どの様に生活綴方の実践が深化・拡充していったかも一つの課題として検討する。

しかし、今回は、子どもの書いた綴方を引用して、作品で何が問題となり、どの様な指導が行われたかも綴方の内容から子どもの生活現実、あるいは、子どもを含めて生活者である地域の現実

の姿があらわとなるであろうが、通時的、共時的に、北海道の生活綴方の成立史の研究を進め、さらにはその実践の価値付け・意味づけをする必要もあり、子どもの綴方作品を活用することはしなかつた。

また、自然条件が過酷であり、東北の国語教師が大きな課題として提起したこの暗澹たる濁流にあえぐ北日本の地域こそ我等のひととき「生活台」と把握した課題を北海道も同様に提起する。したがって、北海道の「生活台」にしがみつき、執着しながら綴方実践を試行錯誤し、ひたすらに子ども達の成長・発達を信じて教育に邁進した綴方教師の苦闘の足跡を中心に論究することにする。

キーワード 北海道の生活台、生活教育、生活綴方、文集、生活と表現技術の止揚統一

はじめに

北海道綴方教育連盟の設立は、昭和十年五月の夜であったと坂本亮は回想する。

この年、二十九歳の坂本は、畳に横這いになって、その日、本屋から届けられた千葉春雄編集「綴方倶楽部」に掲載されている函館常磐小学校四年菅原奈々夫の綴方「ナット売り」の雑誌に「背筋に閃光に似たものが走り、たちまちその作品に吸い付けられた」という。そして、北海道にも綴方連盟を作る決心をしたというのである。

しかし、詳細に検討すれば分明になるが、東北地方の綴方教師を中心とする北方教育の影響も看過することは出来ない。北海道の多くの綴方実践者が、直接、東北の地に足を運び、多くの実践に学んでいる事実もある。

今回は、北海道という気候・風土に根ざした地域の生活綴方の成立過程に即して深めようとするものである。したがって、地域性に拘り、僻遠の地ともいわれている北海道の綴方教育実践者の苦闘の記録を中心に纏めることになる。

さらには、今も僻遠の地に教育の情熱を燃やしながら子どもに希望を与えるために嘗々と努力を傾注する教師は多くいる。あるいは、子どもの生活の貧しさにどう対応すべきか、に苦悩するより他に方法がなかった虚しさを綴方実践に光明を見出した教師達の記録を丹念に辿りたい。

一、北海道生活綴方の黎明期

国分一太郎は、生活綴方の定義について次のように述べる。

今日ノ生活綴方トハ、(1)カラダトイノチヲモチ、社会ノナカニ生キル生活者トシテノ子ドモヲチガ、(2)自分ヲトリマク外界(自然オヨビ社会・人間)ノ事物カラ働キケラリタリ、マタ、自分カラソレニ働キケル過程デ、(3)ソノ心身ノ発達ト環境ノチガイニ応ジテ、(4)考エタコトヤ感じタコトヲ、(5)ソノ考エヤ感じガ出テキタモトデアル外界ノ事物ノ具体的ナ姿ヤ動キトイッショニ、(6)自分ノモノニナツタコトバ、体験ト思考ト感動ニウラズケラレタ生活ノコトバデ、(7)日本語ノ文法上ノ約束ニモ合ツタコトバデ、(8)日本ノ文字コトバヲ表記スル上ノサマザマナ約束ニモ、ホボシタガイナガラ、(9)ダレニモワカルヨウニ、ハツキリト表現サセタ文章デアル。(10)コウシテウマレタ文章ヲ生活綴方トイッタリ、生活綴方ノ作品トイッタリスル。

つまり、国分一太郎は、生活綴方は、身体と命を持ち、社会のなかに生きる生活者としての子どもたちが、自分をとりまく外界の事物から働きかけられたり、自分から働きかける過程で、その心身の発達と環境の違いに応じて、考えたことや感じたことを、その考えや感じが出てきたもとである外界の事物の具体的な姿や動きと一緒に、自分のも

のになったことは、体験と思考と感動に裏付けられた生活のことばで、日本語の文法に即した表記で誰にも理解されるように表現される文章であると規定するのである。そして、次のような綴方の過程を通して子ども達を成長させる、というのである。

ワタクシタチハ、コノヨウナ文章ヲ書カセルスベテノ過程デ、マタ、ソノ作品ヲ集団ノナカデ研究シ吟味シ、ソレニツイテ話シアイヲサセル過程デ、子ドモタチニ、(1)事物ノ姿ヤウゴキヤソノ相互ノ関係カラ意味・ネウチヲ見イダシ、事実ニモトツイタ思想・感情ヲ形ツクル態度ヲシダイニツクリアゲ、(2)自然ヤ社会ノ事物ニツイテノ正シクユタカナ見方、考エ方、感ジ方ヲシダイニ養イ、(3)書キ手自身ノ観察力・想像力・思考力ヲノバシ、頭脳ノ能動性・創造性ヲシダイニ発達サセ、(4)コノコトニヨツテ、子ドモタチニ、自由ノ個性的ナ自我ヲ確立サセルトモニ、(5)人間の社会的ナ連帯感ヲ、シダイニ育てイクコトヲ目ザスノデアル。(6)一方、日本語(単語・文法・文章・文章構造ナド)ヤ日本ノ文字ニツイテノ意識的ナ自覚ヲウナガシテイクノデアル。²⁾

つまり、文章を書かせるすべての過程において、また作品を集団のなかで研究・吟味し、それについて話し合う過程で、子ども達に、事物の姿や動きやその相互の関係から意味・値打ちを見出し、事実にもとづいた思想・感情を形作る態度を次第に作り上げ、自然や社会の事物についての正しく豊かな見方、考え方、感じ方を次第に養い、子ども

達に、自由な個性的な自我を確立させるとともに、人間的な社会的な連帯感を養つ、というのである。さらには、日本語や日本の文字についても意識的な自覚を促すことを目的とするのである、と述べる。そして、生活綴方の価値について次のように述べる。

シタガツテ、コノヨウナ目アテヲモツテスルシゴトヲ生活綴方ノシゴトトイイ、コノシゴトニハ、マタ(1)子ドモノ生キタ生活・心理ヲツブサニ、キメコマカク知ルコトガデキルトイウ便利ガアリ、(2)子ドモノ内部ニヒソム可能性ヲヒキダシツツ彼ラノタメニ将来ノ生活ノ準備ヲハカツテヤル効果ガアルノデアル。³⁾

つまり、国分は、生活綴方の仕事は、子どもが生きた生活・心理をつぶさにきめ細かく知る仕事であるといい、もう一方に於いては、子どもの内部に潜む可能性を引き出しつつ、彼らのために将来の生活の準備をはかつてやる効果があるというのである。これを綴方に於ける生活指導と呼んでいるのであるが、東北・北海道の生活綴方の教師達の発表、あるいは、討議・話し合いに参加した留岡清男は、昭和十二年十月号の雑誌「教育」に「畢竟、綴方教師の鑑賞に始まつて感傷に終わるに過ぎないといふ以外に、最早何も言ふべきことはないのである。」と述べ、綴方における生活指導についての疑問、いや痛烈な批判をする。このことについては、第二章で詳細に論じたい。

また、滑川道夫責任編集『国語教育史資料 第三卷 運動・論争史』(東京法令出版 一九八一年四月)には次のように生活綴方につ

いて規定する。

生活綴方は、わが国独自の教育＝学習のいとなみである。そもそも、戦前公教育における初等教育の教科目の一つである綴方科のありかたをめぐって、形式指導（表現技術指導）と内容指導（生活指導・認識の指導）との統一がいかにあるべきかという論議のなかから、このいとなみが発したとみることができであろう。それは、大正デモクラシーの影響を受けた教育界において、個性、自由性をいかに教育の事実として学習者の内面に反映させるかという苦悩のなかから、「書くこと」という教育＝学習活動に個性、自由性を実現させようとした必然的結果であつた。

つまり、「生活綴方は、わが国独自の教育＝学習のいとなみである。」と大胆に述べることは当然であり、このことは波多野完治の次のことばとも照合する。

日本の教育界には、従来二つの種類の流行があつた。一つの種類は大学の先生や高等師範の先生から発するもので、これを「上からの教育思潮」と名づけることが出来る。この流行は大学教授たちが外国の本、特にドイツの本を読んで、彼地で問題になつて居る教育思潮を正解又は誤解してこれを我国に紹介するところから生ずるのであるから、これを「ドイツからの教育思潮」と呼んでもよいと思ふ。（中略）

このような教育的流行に対して、第二の流行は、初等教育実践者の間から出現する。従つて、これは上からの教育思潮に対して「下からの教育思潮」と名づけることが出来る。これは必ずしも、この下からの教育思潮が純粹に我国独特のものであるといふ意味ではない。外国にある思潮が原型を提供して居ることも二三にして止まらない。然し下からの教育思潮は上からの教育思潮が語学的移植による根なし草であるとは異なつて、いつも一定の実践的基盤をもつて居た。さうして実践が歴史的なものである限り社会的歴史的現実に根を下ろして居たのである。

上からの教育思潮と下からの教育思潮とは、同じ流行といつても、そこに盛りこまれる教育的情熱がまるでちがつて居ることに注意しなければならない。上からの教育思潮では、外国で今はやつて居る新しいものが歓迎される。これに反して、下からの教育思想は、いつも、これではなければ日本の教育は救はれないといふ、固い教育的信念が伴つて居るのである。教育の実際家たちは、身をもつて自己の信ずる教育思潮を守らうとする。

ここで波多野が主張することは、上からの教育思潮と下からの教育思潮があることであり、さしずめ生活綴方は下からの教育思潮と位置づけていいであらう。つまり、波多野が述べる「これではなければ日本の教育は救はれないといふ、固い教育的信念が伴つて居るのである。」といふことが重要である、と主張することである。

ところで、昭和十一（一九三六）年から昭和十六（一九四一）年ま

で、女満別尋常高等小学校で実践された所謂「女満別教育」は、国家主義的教育が行われているなかで、真実の教育を求めた教育実践として今日でも高い評価を得ている。女満別尋常高等小学校の校長であった松樹美代治は、教職員のための「学校経営案」を小鮎寛は、昭和十一年八月臨時増刊号『教育を見直す』と題して、北海道北見地域の教師に向けた機関誌「北見文選」にその全貌を紹介する。小鮎は、「編集後記」に次のように書き付ける。

此の書を校正しながら、幾度か私は興奮する自分を感じた。教育者の正常な感情を喚起する多くの文字面にぶつかつて、繰返し繰返し読んだりした。

『諸君は教育といふ為事に生きる。この生活が本当の生活である。今迄もそれに生きて来たし、何とかしてより良き生活を希望してゐる。それが人間だからである。』

何のために其処に生き切れないものが仮に在るとしても、それは要するに本然の姿ではない。私は諸君の其の本然の姿に訴へるだけだ』とか『何時も乙丙の児童に何故また乙丙をつけねばならぬ理由があるか。甲をつけられない理由を児童と共に研究すればよいのだ』等々強く心に響く言葉を一つでも多く読みとつてくれる読者の為に此の書は印刷されたと言つてよい。⁶⁾

つまり、松樹の「教育を見直す」の学校経営案は小鮎寛の教師としての心を揺さぶつたことは確かである。この「女満別教育」の研究会に

波多野完治も参加する。

ここで、女満別教育の特質を紹介する。学習形態について次のように松樹は述べる。

児童が学習する形態を五つに纏めて見られる。(中略)

1、独自学習 主として自分だけの力で学習を進め、他の学習の基礎となるものである。辞書、参考書、参考資料が用意されねばならぬ。

2、互助学習 二人或は幾人かが各自の力を持ち寄りお互いの足らざる所を補い合うものである。辞書その他が用意されること同然。

3、分団学習 定められたる学習分団に於て前の互助学習の精神が行はれる。リーダーの活躍なども自ら生まれて来る。相当重要性を帯びた学習として研究の余地を宿ち、随分導き方により望みをかけられるものと考へられる。

4、協働学習 学級全員が協働する学習で各自各分団の発表、その批判補足、討議、或は特にこの形態をとることを要するものなど、これも重要性を持った学習である。

5、統導学習 教師が表立つて特に中心をなす学習で、前の協働学習の中に属すべきであるが、それは児童が表立つを主とする。勿論それには教師の参加、これには児童のいるくゝな形の参加がなくてはならぬ。⁷⁾

以上、松樹の述べることは、今までの一斉指導の教育を脱皮する為の方法でありつつ、子どもが主体的に学ぼうとする意欲に支えられなければ教育が成立しないとの展望が見えることであろう。このことが小鮎のみならず女満別の教師達に教師が教師としての教える主体性を確立する努力を傾注するようになることは当然であろう。第二次大戦後の略称、全生研（全国生活指導研究会）の主張する学習集団づくりの実践と通うところがある。国分一太郎が「一人はみんなのために、みんなは一人のために」というスローガンで子ども達を勇気づけたことにも通じるものがある。

松樹の次のことばに注目したい。

『校長が先づ教室で児童を指導して見て呉れ、職員に求められて教壇に飛上がった私は、今にして思へば洵に原始的な素朴な学習指導でしかなかったものを臆面もなくやつてのけたのだつたが、大體賛意を表して呉れ、『やつて見る』ことになつたのだ。試みの時代がかくして始つた。尤も以前三月には綴方の一单元三時間に亘る授業をやらせられたが、事前学習に力点を置いたのは既に萌芽を見せてゐたのだ。

私は生活教育の名に対し特に生活指導教育案を樹て、所謂教育の建直しに取りかかつたのである。勿論大それた意味ではない、私の或は私の学校の教育を対象としてであつた。

職員諸君の幾人かは直ぐに実践へうつつて呉れ、他は暫く疑義と模索の状態であつた。間もなく旭師小野校長の視察を受け、御指導や

らいろく御注意やらを頂き、大いに激励もあり職員には特に一場のお話もして下さつた。私共は火鉢からストーブへと代わつて行く職員室で、大いに話し合ひ、時には思はず声の大きくなる事もないではなかつたが、兎に角愉快だつた。次第に職員諸君が実践へと移行し大小なりに動きを見せて呉れた。小野訓導のプランなどなどはよく話題にのぼつたし、私はよく各教室に出かけて共に研究した。かくて児童の学習方面が方向づきつゝある間に、学級自治会が急速度に有力に組織化され活動化されて来てゐた。

つまり、松樹校長も授業実践を積極的にに行つてゐることに注目させられる。教師集団と校長が一体となつて子どものための教育に邁進していく姿勢が鮮烈である。このような状況では子どもも変わらざるを得ないのであろう。教師が変革しなければ子どもが変わることは出来ないとはいえるのである。

もう一つは、女満別の教育実践の基底には、生活教育があることであり、綿密な「生活指導教育案」を用意していることである。それが、この雑誌のタイトルである、「教育を見直す」の重要な観点であることである。松樹は、「職員と児童」との関係の相を次のように述べる。

私は此処では、職員の相、児童の相、更に職員と児童との関係的な相について書かねばならぬ。先づ職員であるが、樋口長市氏（東京高等師範学校の訓導であつた。筆者注）は其の資性に次の如く纏めて

る。

1、教師は生命の愛護者でなければならぬ。即ちすべて教へを乞ふもの、生命に同感し、其の生活を凝視し、伸び行く姿に歓興を覚ゆる人でなければならぬ。

2、教師は自らの心を下して、児童生徒のそれと同一水準線に置き得る人でなければならぬ。

3、教師は種々様々の性格の己を適合せしめ得る人でなければならぬ。即ち自らには崇高なる特質を固持すると、児童には多面的に感心し得る広い性質の持主でなければならぬ。

4、押し強い人でなければならぬ。即ち児童といふ素材的なものを、その性に従ひ質に従つて大成に到達すべく努力を中廃しない人でなければならぬ。

5、事物の観方考へ方に通ずる人でなければならぬ。即ち事物は同一でも観方考へ方が異なれば意味が異なる。教師は児童の観方考へ方の種々なるをそれぞれ指導する人でなければならぬ。

以上の言葉は今でも新鮮に教師に響いてくるものを感じる。最初の言葉である「教師は生命の愛護者でなければならぬ。即ちすべて教へを乞ふもの、生命に同感し、其の生活を凝視し、伸び行く姿に無限の歓興を覚ゆる人でなければならぬ。」という言葉に筆者は万感の思いを抱くのである。

さらに、作業教育について松樹は次のように述べる。

ケルシエンシユタイナーは、言語が唯一の発表手段でなく、言語

の他に図表的及び空間的表現を挙げて、作業が自我の表現に欠くべからざるを示し、更に其の本質を、精神の合理的外面から脱出で精神的存在の非合理的根本層に、即ち表層より体験に徹底すること以外ならないとした。勿論私は今頃作業教育の必要を論じようとするものではない。唯従来の主知的教育の弊に対し、主情意的、否全我的な教育を考へ、即ちなすことによりて学ぶことの児童生活に絶対的必要たるを思つて止まぬものがあるのだ。私は、なすことによりて、学び、学ぶことによりてなす、この立場、或は、なしつゝ考へ、考へつつなす、この立場を教育の上に願ふものだ。

つまり、松樹の主張する作業教育は、ケルシエンシユタイナーの理論でありつつ、ジョン・デューイのなすことによりて学ぶという教育理論でもある。

旭川師範学校附属小学校主事の岡村威儀は、「生活中心の教育」と題する文章に 生活教育七則 を次のように紹介する。

(一) 反主知的情意的

従来の学校は概念に重心を置いて書物尊重なスコラスチックな偏知的な教授場であつたとして、生活中心の教育は一樣に反主知的態度を採り、情意の尊重すべきを主張してゐる。

(二) 具体的直感的

生活から教育を眺めると概念抽象に対して具体的直感的に生活が

含まれることである。生活とは感情を生活するのではなくして感情するが生活であり、生活を意志することではなくして意志するが生活である。而してこの感情し意志し思考するは多くの場合具体的なる何物かに就いてゝある。（以下略）

(三) 行動的労作的

生活の主体は生命活動であつて静止では無く行動である。説明学校的教師中心の嚴肅学校に反対して自己活動を重視し、十分に個性を認めて自己創造自己管理自己独立自己発展の活動を完うさせることに努力する。（中略）「独逸に於ても「児童から」が教育改善の標語となり、ライの行動学校を初め作業生活体験の教育が勢力を振つてゐる。元來児童の生活は遊戯が大部分であるに徴しても分明なる如く、活動的なるものであり寸時も静止するを欲しない。労作が教育の原理とされ学習に作業が重視されるのは当然である。然し自己活動を重視するも放縱なる自由活動ではなく、自己の理想に依つて自己を統一して活動するところの自覚的行動でなければならぬので、こゝに到らしむ為に生活を指導する教師の任務が重くなつてくる、指導とは個人の価値を十分認めて其の最高能率を發揮せしめるやうな補導するの謂であつて、児童自らが教師の指導に従つて自らを生を充実し自ら価値を実現するその限りに於いて其の児童は教育されるので、結局児童自らが自らの生活を充実するに非ざれば教育は成立しない。

ゲーテは夙に「凡ての活動凡ての芸術には手業が先行しなければならぬ、一つの事を正当に知り且つ練習することは生半可なことを

百度するよりもより高い陶冶を与へる」（ウィルヘルムマイスターの修業時代）といつてゐる。この思想を受けてケルシエンシユタイナーがかの労作教育の思想を展開したことは衆知の事実であり、我が国に於いても作業主義労作主義の教育は漸次普遍化して教育原理及び方法として採用せられ更に生産教育にまで發展してゐる。要するに生活に徹する為には労作を離れ得ないだけ行動実践への徹底深化は教育上重要な部面をなすものである。

(四) 實際的社会的

生活教育が生活準備に陥つてならぬこと、實際化が極端なる実用主義であつてはならぬことは纒説したが、「日常生活に必須なる知識技能」の授与を忘れてはならず、理論と實際知識と意志との合一を図り、学習せる事項は社会の实状にも適して社会的活動の原動力となり、将来の生活への有用性が發揮せられるやうに心せなければならぬ。

(五) 全体的体験的

デイルタイが「体験に於いては全心情の過程が共働する、感官は個々のものの多様を提供するに過ぎないのに体験は関連を与える。個々の過程は体験に於ける精神生活全部の全体性に支持せられ、これが吾々自身又他人の了解の本質を物語る」（叙述分析心理学の理念）といつてゐるのは味ふべきであらう。

(六) 創造的発展的

生活は刻々の変化であり、生命の躍進である。然し生命の推進のまゝにおし流されてはならぬ。教育は現実の児童を出発点とするが

現実には理想より遠い、ありのまゝのものをあるべき状態に助成し、生活の向上を祈念する。引き出すだけでなく引き上げることが教育である。

(七) 精神的鍛錬的

……生活教育が眞の生活精神を培ひ鍛錬と実践とを伴つて始めて徹底的生活行者が育てられるのである。ペスタロッチの「生活が陶冶する」の語も実践を通して心情の陶冶されることを説いたものとして意味深淵であるを思ひ、生活教育は一面に更に更に力強い教育へと発足しなければならぬ。⁽¹⁾

つまり、「生活教育七則」の概要を紹介したが、生活教育の帰結は、「児童性、児童生活の基礎調査、生活教育体系、教材の生活化・実際化、学校、学級の経営法、生活訓練、生活体育、生活教育の諸施設等の実践を深めることであるとする。したがって、生活教育の具体化に心を砕き、デルタイ・ペスタロッチの「生活を陶冶する」ことを実践を通して具体化する。

筆者は、北海道では、昭和十(一九三五)年代に既に生活教育について関心があり、その例として女満別尋常小学校と旭川師範学校附属小学校の二校の生活教育を紹介したのである。

二、北海道綴方教育連盟の独自性

北海道綴方教育連盟の設立は、昭和十(一九三五)年八月七日午後

三時、札幌の中心部にある富貴堂書店に、あらかじめ郵送しておいた目印の小さなリボンをめいめいの胸につけて、同志の教師達は集まった。遠くのそれぞれの地方から汽車に揺られて自弁で集まってきたのは十六人であつた。

この日は連盟の組織や規定の基本的なことを話し合つたが、連盟の同人には綴方の実践者ならだれでもなれることとし、幹事長や幹事はおかず、連盟運営の事務上の責任者を地域別に決め、道南・小笠原、道西・吉岡、道北・小坂、道東・坂本、それに網走地方は小鮎を加えて五人を、事務同人ということと選出する。小鮎は、その日は不参加であつたが、連盟の結成には賛同していた。連盟の事務所は、釧路の柏木町の坂本の自宅にする。実質的に、坂本が北海道綴方教育連盟のリーダーとなる。

翌日の八月八日、吉岡一郎の勤務する大通小学校に集まり、前年(昭和九 一九三四 年)に、「北日本国語連盟」の「北方性」の宣言に触発されたことである。ここで、「教育・北日本」宣言を次に紹介する。

我等は單純に觀念的地域として、乃至封建的部落根性のために北日本を区画せんとするものではない。明らかな事実として植民地以外、この北日本ほど文化的に置き去りをつくっている地域は外にあるまい。又封建の鉄のごとき圧制がそのまま現在の生産様式に、そしてその意識状態に規制を生々しく存続しているところはあるまい。しかも加うるに冷酷な自然現象の循環、この暗たんとして濁流にあ

えぐ北日本の地域こそ我等のひとしき「生活台」であり、我等がこの「生活台」に正しく姿勢する事によつてのみ教育が眞に教育として輝かしい指導性を把握する所以であることを確信し、且つその故にこそ我等は我等の北日本が組織的に積極的に立ち上がる以外全日本への貢献の道なきことを深く認識したのである。「生活台」への正しい姿勢は観照的に、傍観的に子供の生活事実を観察し記述するのではない。我等は濁流に押し流されてゆく赤裸な子供の前に立つて今こそ何等為すところなきリベリズムを揚棄し、野性的な彼等の意欲に立脚し、積極的に目的に生活統制を速やかになしとげねばならぬ。

つまり、「この北日本ほど文化的に置き去りをくつている地域あるまい。又封建の鉄のごとき圧制がそのまま現在の生産様式に、そしてその意識状態に規制を生々しく存続しているところはあるまい。しかも加うるに冷酷な自然現象の循環、この暗たんとして濁流にあえぐ北日本の地域こそ我等のひとしき『生活台』であり、「と北日本の生活綴方教師を中心とする国語教師はその重荷を背負うことになるのである。いや、その過酷な自然や長年培われた封建的部落根性から、子どもを救い出すことを決意したのである。

さらには、北海道綴方教育連盟においても問題、つまり課題とされている「生活台」の内実を明確にすることが求められるであろう。北日本と、北海道では、貧困とか自然現象については条件としては同一のものもあるが、教育条件、生活の有り様、或いは、いまだに六十歳

以上の人たちは、本州のことを内地と呼び、北海道のことを外地と言うのを筆者は聞いて驚愕した覚えがある。北海道綴方教育連盟が結成されたのは、前述した如く、昭和十（一九三五）年八月のことで、東北の北日本国語教育連盟の発足から遅れること、およそ七ヶ月であった。

一九三五年五月、釧路の小学校教師であつた坂本亮は、千葉春雄編集『綴方倶楽部』（東宛書房 昭和八年一月一日発行）に掲載されていた、小笠原文次郎に指導による函館市常磐小学区尋四菅原奈々夫の作品「ナット売り」を読んで衝撃を受けた。この作品は、「子どもは信賴しない教師には、決して心を打ち明けようとはしない。無理に子どもをねじあげようとしても、子どもは一層心を固くしてしまふ」と考え、「眞実の教育は何であるかということを求めつつあつた」坂本の心に、「この綴方こそ北海道の子どもの眞実の姿である。」と確信したといつのである。その綴方の内容は、父は樺太に働きに行つていない。兄と一緒にナット売りをして家の家計を助けるという内容である。北海道の冷酷な自然の状況にもめげず、ナット売りをする声も出せなかつた子ども達の心理・行動が綿密に描かれている。選者の千葉春雄の批評も適切であり、子どもが現実の生活を見据え、それにとじろぐこともなく生活に立ち向かう姿勢・力量が形成されていく筋道も見えてくるよい作品である。坂本は、文学愛好の青年教師であり、小砂丘忠義編『綴方生活』、千葉春雄編『教育・国語教育』、菊池知男編『綴方教育』から大きな影響を受けていた。坂本は、前掲の雑誌に掲載されていた北海道の国語教師に綴方教育連盟結成の呼びかけ

をしたと、筆者に當時を回想して語ってくれた。

連盟結成の趣意書は、次のようなものであった。

最近全国的に、各地綴方の研究集団が結成されつつある。そしてそれぞれの地域性に立つ生活指導を、綴方教育によって果たそうとして、活発な論議を内部的に行っている。特に北海道に隣接する東北地方では、一九三四年に北日本国語教育連盟を作り、その組織を通じて、研究がもっともさかんである。本道でもこの際、強力な研究集団を作って、相互の実践を一層高めたい。自由にして熱烈、清新にして活発な論議を尽くしたいから、次の日時と場所に集まってもらいたい。

以上の趣意書からも分明の如く、連盟の結成を促したのは、東北の北日本国語教育連盟の結成であった。と断言できるであろう。坂本亮は、当時、「その組織的な研究活動は、いろんな雑誌に伝えられて私の羨望の的であった。」と回想し、連盟は、東北の「北方性」に対して、北海道には「北海道性」なるものがあるに違ひなく、「それを検討し規定することが、綴方教育の上で問題とすべき所である。」と考へ、検討するようになる。

連盟の機関誌『綴方林』創刊号（一九三五・十）の巻頭に、「綴方生活台としての北海道性」を掲載する。その「綴方生活台としての北海道性」は、次のように述べられる。

(1) 開拓の政治機構と道民の生活機構の緊密性

地方政治と道民との連関は、他府県のばあいよりも、北海道のばあい、その拓殖計画に伴なって、いっそう緊密の度が強い。土地開拓を中心とする産業や土木や交通や衛生や教育は、北海道庁の政策や中央の出先機関の統制や補助や勸奨によって、大きく動かされている。（以下略）

(2) 道民としての生活の伝統が浅い

本州あるいは四国九州の府県から、集団的にあるいは個々に移住してきた道民の生活の伝統は、きわめて浅い。集団的な移住の場合、既住地の生活慣習をそのまま保存しようとする傾向がつよいが、それすらも自然環境や生活条件、周囲の村落の影響や刺激からしだいに新しいものに変貌していることは明らかである。（中略）

伝統が浅いから因習的なものがない。そのかわり、村の家々や人びとをつなぐ情愛もつすいばあいもある。（以下略）

(3) 文化に対して吸収性と弾力性に富む

道民が生活の長い伝統をもたぬことは、反面、新しい文化に対して吸収性と弾力性に富むことになる。北海道に初めて旅行してくるひとたちの、一致した印象では、京浜の中央文化が東北をのりこえて北海道に吸収され、それがきわめて弾力的な形で生かされているという。中央の近代文化・美術・文芸・演劇・音楽・映画界などにおいて、中堅の人材として活躍する本道人が多いのも、本道人の文化に対する弾力ある反応の具体的なあらわれのひとつである。北海道は行政的な地域の規模からいっても、他府県の比ではなく、した

がつて企画される文化的な諸行事も、独立的な企画において他に卓越するところがあり、いっそう文化的に弾力性に富むところがある。（中略）

ただし、文化に対するこの種の敏感さや反応しやすさが、北海道の大地に深く根をおろしきらず、ともすれば、浮薄な面を伴うきらいもある。（以下略）

(4) 地域に懸隔性とその生活特性

北海道の地域が広大であることは、道内各地域の道民の生活性の懸隔を大きくしている。道南と道北とは、道民の生活の相違は大きい。同じく道南でも、太平洋に面している日高地方と根釧地方とは、地域性ははなはだしく異なっている。地域の生産的な諸力からいえば、道南渡島・檜山・後志ちほうはいちおう発展の限界にたつたといえるし、石狩・空知・上川は成熟期に近い。道東・道北は、総体的にはこれからという地方であつて、経済力からいっても文化の様相はすこぶる差異がある。これらの差異ある諸地域を、たんに一般的に北海道という観念で律することなく、その地域の特性にそくし、生産的諸条件を十分に考慮して、文化的な諸政策、とくに教育行政は深く考察されるところがなければならない。

(5) 生産機構の特殊性

拓殖の諸政策中、その筋金となつてゐるのは産業政策である。北海道の消長、地域の盛衰は一にかかつて、その生産力の問題にかかつてゐる。北海道の中樞産業である農業は、本州と異なる粗放農業である。道南・道西の水田地帯の一部をのぞいては、地力の維持や

栄養の自給の必要から、牛を中心とする酪農村であるべきことが、定論となつてゐる。特色的な漁業も、沿岸漁獲の原始的な形を脱せず、魚群襲来の自然的条件によつて、その消長が左右される。経済的に確実な基盤を持たない漁村の文化は、農村に比していっそう不安定であり、ここにさまざまな教育的な問題が生起している。さらに全国産額の七割をしめる林産業や鉱業も、本道の生産機構の特殊な様相を示している。（以下略）

(6) 自然環境の特殊性

風土はたんなる景觀ではないとしても、北海道の自然のもつ迫力や、情趣がひとつの明瞭な地域性を形造つてゐる。しかし北海道は、旅行者の牧歌的な讃辞につきるものではない。むしろ、北海道の人と自然の関係は、荒々しい自然が人を、家を圧伏させている感がある。（以下略）

以上が、「綴方生活台としての北海道性」の規定である。「北海道性」の主張は、東北の綴方教師達の主張する「北方性」に対する、北海道の綴方教師達の対抗意識があることは疑えない。七項目にわたる「北海道性」の主張は、道民生活、道民性を的確に把握しており、その意味においては間違つてはいない。けれども、その把握の仕方は、風土論的であり、自然決定論的である。わけても、子どもの教育をどうするのか、が決定的に欠落していることを危惧する。この規定を肯定的、かつ善意に見れば、北海道の「生活台」を執拗に追求したとも捉えられるであろうが……。北海道の綴方教師はどちらかといえば文

芸術的であり、感性的であったといえるであらう。もっと踏み込んだ言い方をすれば、日本資本主義の発展過程に位置づけて把握し、地域性と同時に全国的な動向をも視野に入れた大胆な展望を示す必要もあつただらうと、把握するのが筆者の立場である。

ところで、北海道綴方教育連盟は、その事業として機関誌『綴方林』と、ガリ版刷りの『同人通信』を発行し、さらに講習会も開催する。連盟の仕事を陰に陽に支えた人に、石附忠平、飯田広太郎、森善次、桜井忠、佐藤麟太郎等がいたことが注目させられる。北海道の国語教育の先達の人々が強力に支援をしてくれたことが連盟が充実する機能を果たすことになつたのは当然である。前述したが、昭和十一（一九三六）年八月九、十、十一の三日間、札幌第一中学校の講堂で教育夏期講習会を開催する。児童の村小学校の生活教育の主唱者のひとりであつた野村芳兵衛は、「綴方教育の今日的指標と実際の設営」と題する講演をする。この時の講習会の内容を戸塚廉は次のように紹介する。

八月九日 綴方の同人達の中心問題が、綴方お越えて全生活教育の問題に向つているところが、この連盟の今後の正しい動きお暗示しているものと言えよう。

八月十日 発表会でわ池田君・水野君と連盟同人の中井君・小鮎君が話す。池田君わ綴方の題材についてのこまかい研究、水野君わ綴方におけるリアリズムのあり方について、中井君わ環境に生きる方法としての綴方、小鮎君わ綴方の大衆化の問題お、それぞれ自

分の経験お基礎として意義深く語つた。

終つて文集展覽会場に行く。全国から集めた優良文集が、二教室にギツシリ並べられ、壁には分布図などがはり出されている。これらの文集の注がれた教師たちの熱意と労力は大変なものだ。だが果たしてこれでいいのか、とゆうのが僕の明日語るテーマだ。会場で読者の阿部恂君や鈴木正之君に会えてうれしかった。

八月十一日 最終日。講演後、すぐに紙芝居おやる。扶桑閣から本が届いて、松永君の紙芝居の本が売切れ、注文が続出する。午後は国分君が「生活組織の綴方的諸問題」、連盟の横山真君が「生活真実とその抵抗面」、同人藤原行孝君が「子供と文集」について語り、僕は農村の文化運動の経験から、今の綴り方人にたいして感ずる疑問お語つた。⁽³⁾

以上、札幌第一中学校で開催された「教育夏期講習会の」の概略を紹介した。ここで注目したいのは、「綴方お越えて全生活教育の問題に向つているところが、この連盟の今後の正しい動きお暗示している」との箇所である。そして二日目に優良文集の展示会が、二教室のギツシリと並べられていることである。以上のことから、昭和十一（一九三六）年代は文集活動の充実期と把握できるであらう。

昭和十一（一九三六）年七月号の百田宗治編雑誌「工程」で文集再版号として、山形の国分一太郎の「もんべの弟」、宮城の鈴木道太の「手旗」、北海道では坂本亮の「ひなた」が掲載される。鹿児島島の磯長武雄は、坂本の文集「ひなた」を「おそらく今日までこの詩文集を凌

驚するものは他にあるまい。」とまで激賞する。最高の讃辞である。また峰地光重は、坂本の文集「いなた」を「子どもが作った文集として最高である。」と評価する。

ここで北海道綴方教育連盟の教師の文集を次の紹介する。

横山真「えんばく」、小坂佐久馬「高台の子供」、土橋明次「屯田兵」、中井貴代之「原野」、酒匂精一「北日本の子供」、高嶋幸次「丘」「除虫菊」、小笠原文次郎「ときわ」、中山亀太郎「ハナカゴ」、入江好之「少年」、藤原行孝「赤い夕日」等々である。

三、綴方の生活指導を深めるための論争

昭和十二（一九三七）年八月、連盟は綴方による生活教育から広く一般の生活教育に視野を広げる観点から、政法大学の城戸幡太郎を夏の講習会の講師として札幌に招聘する。その時、留岡清男が参加していた。坂本の連盟史によれば次のようなことが起こる。

会合で場慣れしているらしい松永君が発言した。すると城戸氏の隣席にいた人物が、自分は今度の講師と同様法政にいる留岡であるがと名乗って、諸君のいう生活指導ということがどうも腑に落ちぬが、もっとはっきりいって貰いたいと言った。留岡清男の名は、城戸氏とともに岩波の雑誌「教育」の共同編集者として知っていたが、同氏の語調は相当手厳しく、松永君や黒滝君などがいうと、君たちに聞いているのではない。連盟の人たちにたずねたいのだ。君

たちはその実践者でないからわかるはずあるまい、というふうな言い方であった。

そこで連盟のだけれが、「教室の中の優れた作品を子供に研究させる。研究は子供の生活を培う」というようなことをいった。「それで生活は育つのか」といわれ、われわれは「育つ」というような応酬の形で、連盟のものたちと留岡氏との話は結論に至らずじまいに終わった。

つまり、留岡は、綴方の実践だけで生活指導云々することが出来るのであるとか、という直接的な疑問を連盟の教師に求めたのである。その解答に留岡は納得できなかった。そこで昭和十二（一九三七）年十月号の雑誌「教育」に、留岡は、「酪農と酪農義塾」のタイトルで次のように北海道綴方教育連盟の生活指導の考え方を批判する。

……今夏札幌第一中学校に於て開催された北海道綴方教育連盟の座談会に出席したことである。同連盟の人々は、生産主義の教育を標榜し、これを綴方によって果たさせようとしてゐる。少なくとも綴方科によつてそれが一番自由に果され得ると信じてゐる。座談会では、綴方による生活指導の可能性が強調されたが、理屈を言へば、何も綴方科ばかりではない、どんな教科だつて生活指導が出来ない筈はなく、またそれを当然なすべきである。併し、問題は綴方による生活指導を強調する論者が、一体生活指導を實際どんな風を実施してゐるか、といふことが問はれるのである。強調論者の実

施方法をきいてみると、児童に実際の生活の記録を書かせ、偽らざる生活の感想を綴らせる、すると、なかなか佳い作品が出来る、之を読んでかかされると、生徒同士が又感銘をうつける、といふのである。そしてそれだけなのである。(中略)このやつな生活主義の綴方教育は、畢竟、綴方教師の鑑賞に始まつて感傷に終るに過ぎないといふ以外に、最早何もいふべきことはないのである。

つまり、留岡は、綴方指導だけで生活指導するのではないと言つのである。北海道綴方教育連盟の教師たちは、「畢竟、綴方教師の感賞に始まつて感傷に終るに過ぎない」とまで酷評される。

波多野完治も「生産主義教育論の生産性」の雑誌「教育」(岩波書店 一九三八年五月一日)の題目で生活指導の在り方について次のように言及する。

五六年前まで圧倒的に初等教育界を支配していた生活指導乃至生活表現との関係は、明確に把握されて居ない。多くの人は、この二つの生活主義を同じものと考へて居る。生活主義を現に主張して居る人々の中にあつても、この二つは単に程度の相違としてしか考へられて居ないやうである。たとへば、北海道の論客小鮎氏は甘粕石介氏の批評に答へて、これは生活指導の教育の農村版であるといふやつな意味のことをのべて居る。つまり高師訓導らの主張する生活指導の考へは、理論的に非常にすべれたものであるやうに思はれる。そこで、これをそのまま農村の子供にうつして見ると、結果は

さつぱり思はしくない。どうしたわけかと考へて行つて小鮎氏は、都会の子供が主に消費生活をやつて居るのに対して、農村児童には消費生活がほとんどないこと、その意味での子供らしい面白さは農村児童には見出せないこと、その代わり農村児童は、親の手だすけや、その他実在(主として自然)の直接接触の面と能力にかけて、都会児童の及びもつかぬものをもつて居ること、これを發揮せしめることが、農村における眞の生活指導であることを発見し、主張するに至るのである。

このやつに小鮎氏においては、小鮎氏等の生活主義は、たしかに都会の生活主義とはことなつたものとして主張されては居るのであるが、然しこれは、「生活主義」のことなりとしてはなくて、単に「生活」のことなりとして、理解されて居るやうに見える、と波多野は批判する。

つまり、波多野は、生活指導の概念が正確に把握できていない教育実践現場教師の在り方を痛烈に批判する。

前掲の文章で、坂本の文章を取り上げ、その問題点を次のようにも批判する。

したがつて生活主義の綴方が技術主義の綴方に対立するところのものは、技術主義で書かれる生活が比較的自由で児童の選択に委ねられる部面が多いのに反し、生活主義では書かすべき生活が教師によつて選択されるのが普通であつた。又生活主義の綴方が文芸主義

の綴方と対比されるところのものは、文芸主義では作品を停止的に眺めるのに対し、生活主義では作品を発展的に見るのである。

この文章の中で我々は

- (1) 坂本氏が生活主義とだけ言つて、生活表現派の考へ方やその他に言及して居ないこと。従つて少なくともこれとはつきり対立しようとの意図を示して居ないこと。これは氏が技術主義や文芸主義と自己とを鋭く対立させて居ることを考へると、重要な意味をもつて居る。

- (2) 「生活を発展的に観る」といふ言葉をつかつて居ること。この言葉は生産性の綴方以前における生活指導綴方の合言葉であつた（作品そのものではなく、作品にあらはれる生活を第一義に見るのである）ことを考へると、やはり意味をもつてゐる。

かやうに、坂本のやうに鋭角的な頭脳の持ち主においても、この両者の生活教育の区別がはつきり考へられていないことは、注意を要しよう。

つまり、波多野は、坂本のような鋭角的な頭脳の持ち主であつても生活指導の概念が明確でない、というのである。留岡や波多野の批判を受け、北海道綴方教育連盟の教師も留岡、波多野の考え方が正しいことに気がつく。そして、あれほどまでに反発していた留岡の主張を理

科学研究会の研究会も北海道の各地で開催するようになった。留岡の主張する生活指導を理解することによって北海道綴方教育連盟の教師の実践はさらに飛躍的な進歩を遂げるのである。

女満別尋常高等小学校の小鮎寛は、わざわざ東京にまで出向いて留岡の指導を受けるようになる。北海道綴方教育連盟の実質的なリーダーである坂本亮も教科研の研究会に参加するようになり、留岡の主張する生活指導を理解しようとするようになる。

小坂佐久馬は、昭和十（一九三五）年十月の早い段階で「子供の生活台に立つ生活綴方」その基礎的な実践場面「の研究を纏め、十月八・九日に開催された北海道教育研究会で発表する。

小坂は、生活台に立つ生活綴方について次のように述べる。

生活統制の原拠は、特定の地域の上に保たれる人間集団の歴史的社会的関係の中で与へられ、其所から生活の指向性が規制される。言葉を換へると、子供の生活は、子供自身の力だけで進展し得るものでなくて、親・家庭・学校・社会の環境に触発され、制約されつゝ育ち、よりよき位相へ成長してゆく、といふことになる。觀念で描いた子供なら兎も角、生きた現実の子は現実の社会から切り離しては考えられなくなつた。児童心理の尊重はいゝ、しかし、子供の個性を絶対的なものとし、これのみを至上のものに祀り上げる心理的立場も、われわれは社会学的な理拠からは正する必要がある。ともあれ子供は、子供の立っている生活台の性格 環境性 を母胎として生まれ、其所で育ち、其所にのみ現実としての在り方を

持つ。だから生活を育てる為の生活綴方であるならば、当然、具体的な子供の生活台の上に立たねばならぬ、といふことになり、それには何よりも先づ子供の依存する生活台の性格を、はつきりと正しく認識することから発足しなければならぬ。これが、とりも直さず、子供の生活現実を止揚して、生活眞実　発展的な共同体社会を建設しようとの意識となり、指導意識の核心的な拠りどころともなるのだ。⁽¹⁷⁾

つまり、小坂は、子どもの「生活台」を「子供の立っている生活台の性格　環境性　を母胎として生まれ、其所で育ち、其所にのみ現実としての在り方を持つ。」を確信を持って断言する。つまり、子どもの全生活を担う覚悟が教師に求められる、と言ってもいいのである。したがって、子どもとの絶えざる対話が必要となり、教師も子どもも赤裸々に自分をさらけ出すことに他ならない、と主張する。経済的貧困もある。気候不順な北海道の生活条件は劣悪であった。にもかかわらず、教師は子どもを励まし続けると同時に、その貧困と闘う強靱なる意志が必要だったのである。

小坂は（研究目的の四、五人程度の班）を作り、その集団で研究の課題を考えさせ、その課題を解決するための綴方指導もたびたび行っている。詳しい内容については別の機会に論述する。

旭川の小学校の教師で文集「屯田兵」を発行している、土橋明次は、野村芳兵衛の主催する雑誌「生活教育」（昭和十二（一九三七）年三月号）に「紙芝居の前進のために」と題して、遠く離れた他の

子ども達が、互いに刺激しあい、示唆しあつて、その生活を計画し、組織して行くためにも、紙芝居を交換しようではないかと提唱する。昭和十四（一九三九）年雑誌「教育・国語教育」において、横山眞は、「わが学級文化」の実践に於いて教師と子どもとの協働作業、子ども同志の合作で紙芝居を製作したことの報告がなされている。昭和十五（一九四〇）年一月には、坂本亮は乞われて北見の美幌、遠軽、温熱湯、中湧別の小学校で紙芝居の実演をしたとの報告をご本人から直接に聞いたことがある。教科研の各支部でも教育紙芝居部会を設けて研究を深めたという。これも昭和十一（一九三六）年八月九、十、十一日に札幌第一中学校で開催された「教育夏期講習会」での成果が実ったということができるであろう。

次に文集が生活綴方の実践教師によつて真剣・真摯に実践されたことは評価されているのではあるまいか。

最後に北海道生活綴方教育連盟の結成は、今まで点であつた生活綴方の実践者を組織し、実践者同士の切磋琢磨によつて大きな前進を遂げたことである。大森尚は、土橋明次から文集を買い、その実践を聞きながら、自身も文集「どんぐり」を出版し、子どもの心にじかに呼びかける興奮と喜びを知つたという。「この作者のように家の暮らしをよく見つめて一生懸命働け」、「欲をいえば心の目を見はつて遠慮なくあらゆる物」ことを批判する方がお前を發展させる。しかしそのためには働くことが鈍つてはねうちがなくなるぞ」との評語が書けるようになったと告白する。子どもの生活をよく見なければ、前掲のような評語が書けないことを悟つたと、「高石会」の総会で筆者に語つてく

れた。「凶作でションボリして暗い影を背負っている子ども達に、自分たちの生活をよく見極めさせ、それに負けず、元気に立ち上がる人間となれ、がんばれ、そして立派な百姓になるんだ」と叫びたい素朴な気持ちだが、生活綴方に取り組ませる導因だった」と、大森は静かな口調で語ってくれた。静岡県の稲取で開催された高石会の席であった。昭和六十（一九八五）年十一月のことである。

さらに言及しておきたいことがある。それは子ども読書指導についてである。古くは『村の綴り方』（厚生閣書店 一九二九年）を発売する木村文助は鈴木三重吉の発刊した雑誌「赤い鳥」の童話を読ませることを奨励し、坂本亮も、雑誌「赤い鳥」の童話を文集「ひなた」に掲載して子ども文章表現力の一助としつつ、また子どもの豊かな情緒を育成することを狙ったという。他の北海道の生活綴方の教師達も生活を見つめ、深め、さらに生活に挑みかかり解決する方向を模索する強靱な学力・生きる力を育てつつも、子どもに豊かな感情を育成するための読書指導への目配りをも忘れることはなかったのは当然であろう。このことは北海道なるが故に、中央の文化を吸収することの重要さに気づき、児童文学によって人間力、文章表現力の力をつけることをねらったのであろう。

おわりに

今回は北海道綴方教育連盟の生活綴方実践の基底を支える生活指導について論じた。具体的な児童作品を取り上げて論証すること

を省いたが故に、このことが今後の課題となることは当然であろう。

今回の研究では佛教学平成十三年度特別研究助成による研究であることを報告してその責めを果たす。

〔注〕

- (1) 国分一太郎『生活綴方読本』（百合出版 一九五七年八月）十頁「第一章 生活綴方の定義」として生活綴方の定義が重要である、という認識が国分にあったことを重視したい。つまり、自分たちの力で作り出した綴方的教育方法でもあるからである。
 - (2) 前掲書 十一頁
 - (3) 前掲書 十二頁
 - (4) 滑川道夫責任編集『国語教育史資料第三巻運動・論争史』（東京法令出版 一九八一年四月）四二四頁
 - (5) 波多野完治「生産主義教育論の生産性」雑誌「教育」第六巻第五号 七二八―七一九頁
 - (6) 「北見文選（北見教育会綴方研究部発行 一九三六年八月二十八日発行）」と記される。印刷所は青森刑務所となっている。
 - (7) 前掲雑誌 五十一―五十一頁
 - (8) 前掲雑誌 三―四頁。生活指導教育の理論と実際、価二圓八十銭。これはある日の職員室の黒板に現はれた文字である。「そんな本が出たのかい、誰が書いたのだい。私はホウといふ気持ちだった。職員室は爆笑だ。『いや、今に此の学校から出るといふ豫告なんですよ』小林君が誰かの説明で私も爆笑の仲間入りだ。建設々々、この愉快な坩堝の中に、職員室の努力を敬し、児童の動向を凝視して、『やれる』この確心を強めて行ったのである。
- 以上の言葉から女満別尋常高等小学校の教師集団のモラルの高さが窺われる。校長と職員との壁を越えて切磋琢磨していこうとする教師集団が育っていることが分かる。子どもを立派に育成するためには、教師が自らが教育力を培おうとする意欲・意志に溢れていること

が証明されているであろう。

(9) 前掲雑誌 三十四頁 前掲の五項目の纏めに対して、日本では労作教育の主唱者としてのケルシエンスタイナーの影響があつたと松樹は指摘する。ちなみに、松樹も女満別尋常小学校の教育実践研究には、ケルシエンスタイナーの理論を活用する。

ところで、旭川師範附属小学校では、昭和十年の公開研究会のテーマは「生活教育の実際」となっている。女満別尋常小学校にも研究指導を行った旭川師範附属小学校校長の小野定助は「郷土教育、作業教育、公民教育等を強調せねばならぬ。」と注(11)序で述べる。さらには、生活の概念を正確に規定すべきである、と強調する。

(10) 注(6)の四十九頁

(11) 教育研究叢書第九輯『生活教育の実際』(旭川師範学校附属小学校一九三五年十月)八〇九頁

(12) 雑誌「作文と教育 臨時増刊号」北方教育の遺産(日本作文の会編集・百合出版 昭和三十七 一九六二年七月)十頁

(13) 戸塚廉『児童の村と生活学校』(勤草書房 一九七八年十月)百五十一頁

(14) 坂本亮「北海道綴方教育連盟史」を、「北海道教育評論」という雑誌に「昭和二十七年(一九五二)年代に十六回にわたって執筆する。そこで解説する。

(15) 久木幸男『日本教育論争史録 第二巻 近代編(下)』(第一法規 一九八〇年七月)三九六―三九七頁

(16) 雑誌「教育」昭和十三(一九三八)年五月号七二〇―七二三頁

(17) 旭川師範学校附属小学校北海道教育研究会 研究叢書第九輯『生活教育の実際』七四―七五頁 生活綴方の拠るところ・赴くところの節に書かれる。学校の実態、家庭の実態、綴方に書かれた生活の実態の分析も丹念になされている。

(おかや あきお 教育学科)

二〇〇一年十月十七日受理